

2020年11月  
1163号

# 百葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

## 新しい時代へ飛翔、一冊の会 56年目へ

～初のオンライントーク開催～

新しい時代、まさに2020年は世界が大きな試練を与えられました。新型コロナウイルスの感染拡大により、人々は「命」を守るため多くの制限のなか生活を営むこととなります。一冊の会でも活動が制限され、毎月開催されてきた学びの場である櫻華塾は塾生の健康を考えて早々に休塾。大槻会長の元気なお声も聴けぬまま半年以上が経ちます。新型コロナウイルスの脅威に気持ちが塞ぎ込みがちな日々を過ごす私たちに嬉しいニュースが届きました。

一冊の会の大槻明子会長がSDGs(持続可能な開発目標)の達成を目指すコンテスト、MOTHER EARTH CUP ZERO(MEC ZERO)運営事務局の特別顧問にこのほど就任したのです。今年の10月に56年目に入った一冊の会。大槻会長は2018年、アジア太平洋の女性の相互理解と連携を深め女性の地位向上を高めることを目的とするFAWA(アジア太平洋女性連盟)会長に就任。2019年にはマレーシアにて世界で活躍するリーダーを表彰する“ザ・ブランドローリエ・ブランドICONリーダーシップ賞”を受賞しました。

今回のMEC ZEROの特別顧問就任を機に大槻会長の思いを若い世代に伝えるため、これまでの軌跡を振り返るオンライントークを主催NPO法人一冊の会、共催MOTHERS EARTH CUP ZERO運営事務局でZoomを使用し開催することになりました。オンライン講演とのことでFAWAの理事会大先輩のシンガポールのサラ・メイ・ウー理事、グアムのクリスタル・コガ理事、台湾のベティ理事、フィリピンのオルテガ理事をはじめ世界各国よりメンバーが集いました。長谷川一冊の会理事補が通訳、武本さんが会の司会で、11月28日、進化した櫻華塾が始まりました!

「みなさま、こんにちは!」と大槻会長の大きなハキハキした声。いつもの様に澁刺とされた大槻会長の姿を画面越しに拝見し一同ほっと安堵。同時に新型コロナウイルスに負けずに、精力的に活動をされている大槻会長に圧倒され、襟を正しました。大槻会長からは「猛威を振るった伝染病の一つであるコレラウイルスは江戸時代に日本で感染が拡大し26万人以上の感染者が生じましたが、ウイルスを乗り越える為に必要なことは当時と変わらず、“気力、体力、そして知力”です。私たちも気力、体力そして何より“知力”でこの脅威を乗り越えていきましょう!」と強いお言葉がありました。

本日のテーマは大槻会長の半生の一部と一冊の会の発足、活動です。



東京銀座の会場から世界へ発信する  
澁刺とされた大槻会長と小山副会長

## 1. 大槻明子会長の生い立ちと一冊の会の誕生

今日は嬉しい事に日本・東京銀座・オーラム プラス トリュフの吉田様のご好意で会場を提供して頂きました。有難い事です。また SGO の皆さんも大勢御参加頂き有難うございます。今年は国連創設 75 周年、第 4 回世界女性会議北京会議より 25 周年の意義ある年です。SDG s にもジェンダー平等の達成（目標）がうたわれております。17 ある SDG s の中でジェンダー平等が、**他と異なるのは**、“2030 までに達成しよう”という事ではなく、“**すぐに取り組みなさい**”としている点です。詳しくは機会を見てまた勉強致しましょう。

私は東京で生まれ 2 才の時にサラリーマンの父が大阪に転勤になりになりました。荷物も片付いていないうちに赤紙が来ました。総司令部付き主計将校として中国に出征しました。3 年過ぎ、もうそろそろ帰って来るかと期待している時に、思っても居ない戦死の公報が入りました。父は遺骨となって帰って来ました。母から「あなたは長女だからしっかりしなさい」と常々言われておりました。言論統制が厳しい時代に、20 代で遺族会の会長になった母は、夫が戦死しても涙を見せてはいけない世相に合わせて生き抜くために、と若い未亡人たちを励まし激励を続けました。戦争が激しくなり福島県湯本に学童疎開をした際、母は私の荷物の中には本を半分以上詰めてくれました。最初は友達の可愛いお人形等がうらやましかったけれども、そのうち本が人気となり明子文庫として本を貸し出しました。それから母は私と弟を疎開先から呼び戻し、3 人で静岡県富士に疎開、母が留守の時初めての空襲警報のサイレンが鳴り、私は身の丈もある大きな時計を背負って逃げて、あとからどうしてそんな時計を背負って逃げたのと聞かれたことを思い出します。私としては、学校とか大きな役所にしかない大きな時計が我が家の玄関ルームにあるのは私の家だけだから、大切な物だと考えていました。

戦争が終わり、私は東京都杉並区で暮らしました。当時、字が読めない人のことを文盲者と呼んでいましたが、母が暇を見ては字を教えている姿を見て、識字の大切さを実感しました。そこで、3 歳の息子を中心に 6 人の子どもを集めて読み聞かせを始めました。当時は粉ジュースが主流で、子どもたちは城君の家のバヤリースジュースに惹かれ集まって、イソップ物語やかぐや姫など読み聞かせをしました。その子どもたちのお母さんたちは万葉集、古事記や平家物語、源氏物語等そこから得た感動を近所の人々に分かち合い、次第に輪が大きく広がりました。

その頃、近所の「浴風園」という養護老人ホームの前で、とっても素敵な御婦人と会い、挨拶を交わすようになりました。お住まいをお尋ねすると、「実はそこ(浴風園)に住んでいます」とお答えになりました。当時の老人ホームというのは、身寄りのない人の行くところでした。このご婦人は芦屋の方で夫が急病で突然亡くなり財産は全て 1 人息子に家督相続されました。息子夫婦とは折り合いが合わず、浴風園に入居した事を知りました。

「何かできることはないですか？」と尋ねたところ、他の入居者のためにオムツが欲しいとおっしゃいました。ご自身も辛い中、境遇を呪うのではなく人のことを心配する姿勢に感銘を受け、浴衣を一軒一軒回って集めて洗って、消毒し、ほどいてオムツを作成しました。オムツの寄贈活動を始めたのが 1965 年（昭和 40 年）、継続した活動を評価していただき、平成 27 年に社会福祉法人浴風会創立 90 周年を記念して感謝状を授与されました。

「困っている人に寄り添い行動を起こすことが、社会貢献となるのだ、もっと多くの人を支援していきたい」と思い母に相談し、当時国立国会図書館の酒井悌先生に母の名刺を持って訪ねました。その時「貴女は誰を尊敬しているの？」と聞かれ胸を張って日本人で現存している人の名前を言いました。「それでは世界のリーダーとしての仕事は出来ないよ」と言われ、誰ならよいのかお尋ねすると、国王や、大統領から尊敬される人。例えば、上杉鷹山のような人とおっしゃいました。私はこの人を知りませんでした。そして、図書館に 1 冊しか無いという本を貸して頂きました。一週間後に返すようにと言われてました。とても難しい本で、一週間では読めないと思い丸写し、謄写版で 25 冊の複製を作成し、翌日に持っていったところ、「こんな人初めて、相談役になろう」と言って下さいました。早速「会の名前をつけよう」と言ってくださり、私は、一冊の会！と言うと、酒井先生は「どうして？」と。上杉鷹山を学ぶことから始めたこと。しかも今日は、読書週間です。と答えました。「それはいいね。」と賛成して下さいました。

「読み聞かせで教養を持った人々が文化を話す。本を読むことで世界につながる」と、教育、文化、平和を創る意味と願いを込めて、1967 年に一冊の会と名付けました。この年は“女性差別撤廃宣言”の年です。

母の姿や芦屋夫人の相続の事が女性の人権を学ぶきっかけとなっております。

## 2. 国連の流れと共に 56年

一冊の会は「名誉、地位、財産、学歴、国籍、年齢、男女を問わない会」「見てみよう！聞いてこよう！語り合おうよ、友好の輪 10 人の友だち作り」をスローガンに 56 年間絶えず啓発活動・支援活動を継続してきました。初心を忘れず活動しながらも、時代に合わせて常に前に進み、世界を視野に入れて活動をしています。「国連の活動と共に」をキャッチフレーズに教育、文化、平和、人権、女性の地位向上に重点をおき、読書週間の時期は発展途上国を中心に文具等の支援を、人権週間には、女性の人権を焦点に地位向上の為の啓発活動をする等、持続的な活動しております。SDGs に対する取り組みも国連が発表（2015 年）したと同時に絶えず続けております。

「識字教育に必要な文房具が必要な国はどこですか」と国連ユネスコのマヨール事務局長に質問をして、1 万本の鉛筆をギニアに贈呈した一冊の会の活動は当時新聞に掲載されました。また大学生の皆さんや JR 総連の方々が一冊の会の鉛筆と文房具を自らの荷物に入れ、世界中に配布して下さったこともあり、現在に至るまで 73 カ国の活動の一つ一つが今に生きて未来へと繋がっています。

なお一冊の会創設当初から非核・平和への願いは一貫しております。今年 10 月、核兵器禁止条約が発効に必要な 50 か国に達したことを喜び、塾生が条約を批准した 50 か国をいち早く地図上に記載し、このコロナ禍の中 10 月 25 日事務所に届けて下さいました。櫻華塾はコロナで休止を余儀なくされましたが、そこで育った塾生の皆様は金のように光り輝き、櫻金(おうごん)塾として羽ばたいてくださると思います。一冊の会全員で櫻華塾から櫻金塾生に成長しましょう。

## 3. 女性の地位向上のために 一ブルーの本に込めた思い

故園田天光光先生（一冊の会永久最高顧問）は、1946 年初の普通選挙にて女性が初めて立候補出来、26 歳で当選されました。園田先生を始めその時に誕生した女性代議士の記録はありますが、投票した側の女性達の記録はどこにもありませんでした。そこで、当日の女性の心情・行動を、日本で初めて全国を歩き回り聞き取り調査を行い編纂したのが『1946.4.10. 初の婦人参政権行使と日本女性自立への<sup>なびごも</sup>出発』（通称ブルーの本）です。市川房枝基金を受け、1999 年に発刊しました。このブルーの本は現在「日本女性の原点」「当時の女性の万葉集である」と多くの有識者の方から評価されておりますが、当時は誰もやらないし、どこからも助成金がでない分野でした。それなら自分がやるしかないと腹を括って、家を建て替えるためのお金を遣ってしまいました。新聞に載る時までその事を息子に言えませんでした。息子は「おめでとう」と言ってくれ嬉しかったことを思い出します。最初は 1000 人にインタビューの目標でしたが、赤松良子先生（一冊の会筆頭最高顧問）に 400 人にして複数回足を運びなさいと言われ、最初はその意味が分かりませんでした。しかし、例えば「選挙に馬車で行った」と語っていたけれども、もう一度聞きに行くと牛車だったといったことがありました。当時は、馬は軍馬に取られてしまっただけで殆ど残っていなかったのです。このように傍所固めを徹底して、何度も調査対象者の元を訪れ多くの女性の話に耳を傾けました。会員にも「当時 20 才だった人が今 73 才なのだから、今しかない」と説得し、何度も足を運んでもらい、会員達は家計簿の改ざんをしてお金を捻出したようです。後日「お袋は亡くなったがこの本を仏前に供えています」と電話をいただいたことがあり、当時の市井の女性の記録を残すことの意義を感じ、成し遂げて本当に良かったと思えました。

紙面の都合上内容は簡単に纏めましたが、戦前の言論統制時代の人権問題や、芦屋夫人のように家督相続という法律による女性の配偶者の差別がいかにも不平等であるかをまず知り、櫻華塾では法律を学ぶ必要性を教えてくださいました。

初の試みであった Zoom を使用したオンライントーク、開始時間に全員が Zoom にログイン出来なかったり、音声が入り調整出来なかったりとハプニングもありましたが、オンライントークとのことで全国のみならず、

世界各国よりたくさんの参加者が集いました。特に今回の講演では調整の関係で同時通訳は冒頭のみとなりましたが、2時間に亘るオンライントークの間、FAWAの理事の皆さまは最初から最後まで参加下さり、「日本語は理解が出来ないが、大槻会長の熱意が伝わり、また何より元気な大槻会長よりパワーをもらった」と感想が皆さんからありました。続きを待っています。との声も多くありました。

一冊の会発足に至った大槻会長の思い、それは「自分に出来る社会貢献は何か」ということです。「一本の鉛筆」は“書く力”であり、「一冊の本」は“読む力”。これらは教育の原点であり、これらの力を身につける事により、初めて“考える力”を育てる事になる。そしてそれらが“個人の力”となり、それぞれの“個の力”が“平和の力”へと繋がるのです。新型コロナの猛威により行動が制限されている現在でも、常に「自分に出来る社会貢献は何か」ということを一人ひとりが考え、新しい時代の幕開け、心ひとつに小さなことから行動して参りたいと自覚しました。

### 大槻会長オンライントークの感想とメッセージ



- ①自発的に赤田研究生と城杉研究生が万葉 1163 号を書いて下さった事、本当に嬉しかったです。これが櫻華塾生の最高の証です。心から感謝します。有難うございます。
- ②コロナで皆さん大変な生活と思います。電話ではコロナは移りません。自発的に電話を下された櫻華塾生は、一步、櫻金塾へと進みました。何があっても 前へ。前へ。前へ。が一冊の会の姿勢です。負けない！強い意志で全てに勝って行きましょう！
- ③司会をして下さった武本さんの写真が無くてゴメンナサイ。

皆さんの優しい、温かさに支えられて、私と、小山さんは元気です。

毎日、ふたりで時間をやり繰りし、時間が無い、時間が無い、の連呼から抜け出し、楽しくまた勉強をしましょう。時代に遅れないよう、学ぶ事が山積しております。

★新型コロナウイルス感染症が拡大している昨今、やむを得ず第2回・3回を延期致しましたが、必ず再開致しますのでその時迄少々お待ちください。

第二回 一冊の会、世界へ・世界を舞台に識字活動・FAWA、国連ウィメンで活躍  
第三回 一冊の会、東北へ・今日も来たよ！10年133回以上・86歳、ハンドル握って支援活動  
\*日時は追って連絡致します

最後になりましたが、オンライントークを陰で支えて下さいました、MEC ZERO 運営事務局の皆さま、心から感謝申し上げます。有難う御座いました。

文責：城杉研究員、赤田研究員